

戦争体験継承が平和意識の形成に及ぼす影響  
— 中学生に対する平和意識調査の時系列的分析 —

村上 登司文

京都教育大学

広島大学平和科学研究センター客員研究員

**The Influence that Wartime Experience Gave to Peace  
Awareness: Chronological Analysis of the Attitude Surveys of  
Junior High School Students on War and Peace**

Toshifumi MURAKAMI

Kyoto University of Education

Affiliated Researcher, Institute for Peace Science, Hiroshima University

**Abstract**

World War II, which ended more than 70 years ago, became the past event in 2015. Japanese people reflected on World War II and have developed a democratic society. Because the number of older people from the wartime generation has decreased, it is becoming very difficult to pass wartime experiences directly on to the younger generation. The attitude survey conducted in 2016 clarifies the kind of peace consciousness junior high school students have. I compare the survey results of a survey taken in 2016 with those taken in 1997 and 2006. This comparison elucidates junior high school students' peace consciousness, what they have learned about wartime experiences, and their participation in peace building. This paper analyzes the differences in attitudes between 1997 and 2016 and

describes the survey results in the following order: 1) How students recognize the situation concerning peace and war, 2) Passing on the experiences of World War II, 3) Visits to peace museums, and 4) Methods of peace building. The attitudes of students who replied to the three surveys in the past 20 years seem to be oriented toward pacifism. There has not been a major change in their attitude. As for agents telling students about World War II, the biggest agent was school teachers in the 2006 survey, but in the 2016 survey the main agent was television. Peace education by schoolteachers and television in Japan has resulted in a generation of antiwar and peace-oriented junior high school students. We can conclude that peace education in Japan has achieved the function of political socialization. Under the Constitution of Japan, which assumes pacifism as one of its ideals, junior high students have been taught to think of pacifism. It should be the current responsibility of schools and the mass media to support peace-oriented students' attitudes and their wish to contribute to peace building.

## 1. 研究目的

日本の平和教育の社会的機能の一つとして、文化的伝達機能がある(村上 2009、p.398)。日本の学校教育や平和博物館やマスメディアによる平和教育は、戦争を否定する題材の伝達を主に行ってきた。伝達により過去の戦争体験を日本人の集団意識の中に、集団的記憶として活性化した状態で保存し続けてきたといえよう。

けれども、1990年代以降、マスメディアや家庭を通じて子どもたちが見聞する戦争体験の情報量は減少しつつあり、人々が持つ戦争の集合的記憶が薄くなって、戦争体験の「風化」が進んでいる。日本の過去の戦争について伝える「文化的伝達機能」は、2000年代に入ってさらに低下しているといえよう。

2015年には、第二次世界大戦が70年以上前の出来事になった。日本は第二次世界大戦の反省に立って社会を発展させてきたが、戦争体験世代が少なくなり戦争体験を直接的に伝えることが非常に難しくなっている。現在は、家庭や学校で戦争体験を伝える平和教育は曲がり角にあるといえ、平和教育における対応が必要とされる。

戦後の日本で、戦争題材についてマスメディアを含めた広義の教育は、日本人一般に反戦的で平和志向的な態度を形成してきた。第二次世界大戦の戦争被害についての集合的記憶は、日本人の多くに強い戦争忌避感を生じさせ、戦争抑止の機能を果たしてきた。こうした平和教育は、反核平和主義的意識の形成と保持という「政治的社会化機能」を果たし(村上

2009、p.398)、平和憲法の存続や非核三原則の遵守に影響を及ぼし、防衛費の増大や自衛隊の拡大に、ある程度の歯止めをかける政治的役割を果たしてきたといえよう。2015年に18歳選挙権が認められ、国会で憲法改正の論議が進む中で、中学生の戦争観はどのような影響を受けているのであろうか。

中学生は、地域から国や世界へと社会的な興味や関心が広がる発達段階にあり、彼らが戦争と平和形成についてどのような社会意識を持っているかは、大人たちの社会意識の反映であり、また未来の日本社会の世論の変化を予測させるものである。

2016年初めに行った平和意識調査では戦後71年目の中学生達が、どのような平和意識を持っているかを明らかにすることを、調査の目的とする。2016年に行った調査結果と、1997年と2016年に行った調査結果とを比較することにより、戦後50年目から70年目までの20年の間に、中学生の平和意識がどのように変化したかを分析する。

下記の分析においては、次の順番で考察する。①世界と日本についての平和認識とその理由、②生徒が戦争をどう見ているか、③第二次世界大戦の戦争体験の継承、④平和博物館への訪問、⑤平和形成の方法について、などである。そうした分析により、平和教育の文化的伝達機能と、

政治的社会化機能の実態を示し、今後の方向性を明らかにしたい。

## 2. 中学生の平和意識の分析

### (1) 調査方法

2016年調査の実施時期は、2016年の1月から3月にかけてである。調査方法は各中学校に調査を依頼し、承諾を得た中学校に質問紙票(巻末資料1)を送付し、第2学年の生徒に対して集合法により調査を実施してもらった。

表1に示すように、2016調査で調査対象としたのは、東京都区部、京都市、広島市、那覇市(以下、調査地を東京、京都、広島、那覇と表記する)にある合計18の公立中学校2年生の生徒である<sup>1</sup>。有効サンプル数は1248名で、性別では男子640名と女子607名でやや男子が多い。調査地別にサンプル数を見ると東京が多く、次に京都と広島がほぼ同数、そして那覇の順である。2016年調査と同様の調査を1997年、2006年に行った(以下、1997調査、2006調査、2016調査と記す)。2016調査の実施校18校の中で、2006調査でも実施校であった学校は13校(72%)である。また、2006調査の実施校18校の中で、1997調査でも実施校であった学校は8校(44%)であった。

<sup>1</sup> 調査地として3回の調査で選んだ4都市は、平和教育に関して次のような特性を持つ。まず、広島は第二次世界大戦中に原爆被爆にあい、那覇は沖縄地上戦で大きな戦争被害を受け、両都市共に平和教育が盛んな

土地柄である。京都は戦争中に大きな空襲を受けず現在は古い歴史のある観光都市である。東京は戦時中に大空襲を受けたが、日本の首都として発展している。

表1 各調査の地域別サンプル数

(数字は人数)

| 調査地 | 1997調査 |            | 2006調査 |            | 2016調査 |     |     |            |
|-----|--------|------------|--------|------------|--------|-----|-----|------------|
|     | 実施校    | 全体 (%)     | 実施校    | 全体 (%)     | 実施校    | 男子  | 女子  | 全体 (%)     |
| 東京  | 4      | 242(20.9)  | 5      | 383(26.4)  | 5      | 191 | 182 | 373(29.9)  |
| 京都  | 4      | 275(23.7)  | 3      | 294(20.3)  | 4      | 152 | 157 | 309(24.8)  |
| 広島  | 7      | 470(40.6)  | 5      | 375(25.9)  | 5      | 169 | 139 | 308(24.7)  |
| 那覇  | 3      | 171(14.7)  | 5      | 397(27.4)  | 4      | 128 | 129 | 258(20.7)  |
| 計   | 18     | 1,158(100) | 18     | 1,449(100) | 18     | 640 | 607 | 1,248(100) |

注：2016調査の全体合計においては、性別の不明な者の1名が含まれる<sup>2</sup>。

表2 世界は今平和と思うか

(数字は%)

| 回答      | 2006調査      | 2016調査      |
|---------|-------------|-------------|
| はい      | 12.3 (178)  | 15.3 (190)  |
| いいえ     | 87.7(1,267) | 84.7(1,054) |
| 計 (回答数) | 100 (1,445) | 100 (1,244) |

## (2) 世界と日本についての平和認識とその理由

### 平和と戦争への関心

2016調査において、中学2年生に対して平和と戦争についての関心を聞いた。まず、〈平和〉についてふだん考えたことがあるかの質問では、ある(「よくある」+「たまにある」)と答えたのが回答した生徒の69.7%で、ない(「ほとんどない」+「ない」)が30.0%であった。〈戦争〉についてふだん考えたことがあるかの質問では、ある(「よくある」+「たまにある」)と答えたのが回答生徒の66.1%で、ない(「ほとんどない」+「ない」)が33.6%である。このように2016調査では、〈平和〉についての方が戦争についてよりも、考えたことがあるとする割合が3.6ポイント高い。

10年前の2006調査では、〈平和〉についてふだん考えたことがある生徒が66.5%で、〈戦争〉についてふだん考えたことがあるのが68.6%で、〈戦争〉について考えたことがあると答えた方が、2.1ポイント高かった。過去10年の間に、平和、戦争のどちらを考えるか生徒の多数派は、戦争についてから平和についてへと5.7ポイント(3.6+2.1)の変化があった。

### 世界が平和か

生徒に現在の世界を平和であると考えているかどうかを聞いた(表2)。世界は今「平和」と思うかの質問に、2016調査で「いいえ」と答えた生徒が84.7%あり、圧倒的に世界は平和でないと思っている回答生徒が多い。ただし、「いいえ」と答えた生徒は、2006

<sup>2</sup> 1997調査の有効回答1,158名の内、男子586名、女子568名(性別不明4名)であった。

2006調査の有効回答1,449名の内、男子746名、女子700名(性別不明3名)であった。

調査と比べてわずかに減っている（マイナス 3.0 ポイント。以下、調査間で比較した場合は－3.0P の形式で記す）。

では、なぜ生徒達は世界が平和でないと思っているのであろうか。世界が平和でないと思えた生徒のみを対象に、その理由を聞いた。表 3 によると、生徒の回答で最も多いのが「戦争が起こっている国があるから」（+9.0P）、次に「世界中で事件や事故が多いから」、そして「貧しい国があるから」を世界が平和でない理由として選択している。上位 3 つの順位は、2006 調査と 2016 調査で変わらない。

### 日本が平和か

表 4 で示すように、「日本は今平和と思うか」の質問に、2016 調査で「はい」と答えたのは 59.0% (+17.0P) と大きく増え、「いいえ」と答えたのが 41.0% (－17.0P) である。このことから、過去 10 年の間に、回答生徒の多数派が、日本は平和でないと思うから、日本は平和である、へと移行していることがわかる。

では、どうして中学生達は日本を平和と思うようになったのであろうか。日本が平和であると答えた生徒のみを対象に、彼らが平和であると思う理由を聞いた。

表 3 世界が平和でない理由

(複数回答、数字は%)

| 回答                   | 2006調査       | 2016調査       |
|----------------------|--------------|--------------|
| 戦争が起こっている国があるから      | 78.6①        | 87.6△        |
| 世界中で事件や事故が多いから       | 70.0②        | 73.3         |
| 貧しい国があるから            | 63.0③        | 65.7         |
| 武器があるから              | 48.1         | 53.1△        |
| 一人一人が大切にされていない国があるから | 49.0         | 50.9         |
| 環境破壊が進んでいるから         | 50.1④        | 48.1         |
| その他                  | 6.3          | 8.7          |
| %の合計（設問への回答人数）       | 365.1(1,265) | 387.4(1,054) |

注 1：①～④は%の選択率における順位を示す。

注 2：△または▼は二つの調査結果を比較して 5 ポイント以上の増加または減少の変化があることを示す。以下同じ。

表 4 日本は今平和と思うか (数字は%)

| 回答     | 2006調査     | 2016調査     |
|--------|------------|------------|
| はい     | 42.0(608)  | 59.0(735)△ |
| いいえ    | 58.0(838)  | 41.0(510)▼ |
| 計（回答数） | 100(1,449) | 100(1,245) |

表5 日本が平和である理由 (複数回答、数字は%)

| 回答               | 2006調査     | 2016調査     |
|------------------|------------|------------|
| 戦争がないから          | 81.6①      | 81.9       |
| 安心して暮らせるから       | 43.8③      | 63.6△      |
| 生活に使うものや食料が豊富だから | 63.7②      | 57.5▼      |
| 他の国より平和だから       | 38.8④      | 53.5△      |
| 自由だから            | 35.3       | 29.0▼      |
| 争いや事件が少ないから      | 13.5       | 22.3△      |
| その他              | 3.1        | 2.1        |
| ％の合計 (設問への回答人数)  | 279.8(608) | 309.9(731) |

表6 日本が平和でない理由 (複数回答、数字は%)

| 回答                     | 2006調査     | 2016調査     |
|------------------------|------------|------------|
| 犯罪や事件があるから             | 89.2①      | 82.5▼      |
| いじめがあるから               | 36.3④      | 69.2△      |
| さまざまな差別があるから           | 41.0②      | 44.1       |
| 大きな事故があるから             | 32.9       | 43.5△      |
| 貧困や経済格差があるから           | —          | 36.3       |
| 環境破壊が進んでいるから           | 39.4③      | 36.1       |
| 自衛隊を海外に(イラクに※)派遣しているから | 28.5       | 26.7       |
| その他                    | 9.6        | 10.1       |
| ％の合計 (設問への回答人数)        | 276.9(834) | 348.5(510) |

注：※は2006年の調査における選択肢である。

表5によると、日本を平和であるとする理由として多いのは「戦争がないから」であり、二つの調査ともに81%と変わらない。2016調査で大きく増えた選択肢は順に、「安心して暮らせるから」(+19.8P)であり、「他の国より平和だから」(+14.9P)、「争いや事件が少ないから」(+8.8P)である。外国の治安状況の情報に生徒が触れる機会が増え、そうした情報による国内外の比較によって日本が安心して安全な国であると、生徒の理解が広がったことが理由にあると思われる。

次に、日本が平和でないと生徒達が考える理由を見る。日本が平和でないと答えた生徒のみ

を対象に、その理由を聞いた。表6によると、2016調査で「犯罪や事件があるから」が82.5%と、治安の問題を、日本が平和でない理由にあげる割合が最も高い。平和でない次の理由として「いじめがあるから」が選択され、36.3%から68.9%(+32.6P)と大幅に増えている。これは過去10年の間で、〈いじめ〉を重要な「平和の問題」として生徒達が認識するようになっていることを示している。その次に増えたのが「大きな事故があるから」(+10.6P)である。これは、2011年の東日本大震災による福島原子力発電所の事故の影響を受けていると思われる。2016調査で

初めて選択肢に入れた「貧困や経済格差があるから」を答えたのは36.3%であった。

### (3) 戦争をどう見ているか

#### 正義の戦争論

国際社会には、戦争の中には侵略戦争のように悪い戦争と、国を守るよい戦争とを区別して、正義の戦争を認める考え方がある。この「正義の戦争論」について、生徒達はどのように思ってきたのであろうか。表7に示すように、正義の戦争論への反対（「反対」＋「少し反対」）と答えた生徒は、1997調査では57.3%、2006調査では54.2%（-3.1P）、2016調査で52.3%（-1.9P）であり、3調査共に過半数の生徒が反対である。つまり、正義の戦争論は日本の中学生達に支持されていない。「どちらともいえない」が約3割である。経年的な変化では、過去20年の間に、正義の戦争論に反対する生徒は少しずつ減り、20年間で5.0ポイント下がった。特に2006調査では、前回の1997調査と比較して、「反対」が6.4ポイント減って、「どちらともいえない」と答える生徒が32.7%に増えた（+4.2P）。

性別で経年的に見ると、正義の戦争論

への反対（「少し反対」＋「反対」）は、女子は男子より、1997調査で14.0ポイント多く、2006調査で7.2ポイント多く、2016調査で4.8ポイント多い。正義の戦争論については、女子の方が一貫して反対が多いが、過去20年間で男女差が3分の1になっている。

#### 戦争放棄

次に、生徒達は日本の戦争放棄については、どのように思っているのであろうか。日本では平和主義の憲法の下で、学校教育においても、子どもたちに戦争に反対する態度を育成してきたといわれる。3回の調査では、生徒達に「日本はどのような戦争も行うべきではないと思いますか」と質問した。表8で経年的に見ると、どのような戦争も行うべきでないと思う（「思う」＋「少し思う」）は、1997調査で85.0%、2006調査で86.3%、2016調査で84.2%と、いずれも85%前後と非常に高く、戦争放棄の気持ちが強いことがわかる。そして、思わない（「あまり思わない」＋「思わない」）は10%程度である。20年間の経年変化としては、「思う」全体の中で「思う」が4.9ポイント減って、「少し思う」が5.1ポイント増えている。「思

表7 国を守るよい戦争（正義の戦争）があるという意見について（数字は%）

| 回答        | 1997調査     | 2006調査     | 2016調査     |
|-----------|------------|------------|------------|
| 賛成        | 7.0        | 4.8        | 4.3        |
| 少し賛成      | 7.2        | 8.3        | 10.6       |
| 少し反対      | 10.3       | 13.8       | 13.7       |
| 反対        | 47.0       | 40.4▼      | 38.6       |
| どちらともいえない | 28.5       | 32.7       | 32.8       |
| 計（回答数）    | 100(1,152) | 100(1,442) | 100(1,245) |

注：質問文は「戦争の中には侵略戦争のように悪い戦争と、国を守るよい戦争

（正義の戦争）があるという意見を、あなたはどのように思いますか。」

表8 日本はどのような戦争も行うべきではないか (数字は%)

| 回答        | 1997調査     | 2006調査     | 2016調査     |
|-----------|------------|------------|------------|
| 思う        | 81.3       | 79.0       | 75.4       |
| 少し思う      | 3.7        | 7.3        | 8.8        |
| あまり思わない   | 2.8        | 2.3        | 3.8        |
| 思わない      | 7.7        | 6.0        | 5.0        |
| どちらともいえない | 4.5        | 5.4        | 7.1        |
| 計(回答数)    | 100(1,156) | 100(1,443) | 100(1,245) |

注：質問文は「日本はどのような戦争も行うべきではないと思いますか」

わない」がわずかに減って、「どちらともいえない」が少しずつ増えている(20年間で+2.6P)。

性別で経年的に見ると、日本はどのような戦争も行うべきでないと思う(「思う」+「少し思う」)は、1997年調査で女子は男子より14.0ポイントとかなり多く、2006調査で7.2ポイント多く、2016調査で4.8ポイント多い。戦争放棄に関しても女子の方が一貫して、どのような戦争も行うべきでないと思う割合が多いが、過去20年間で男女差は3分の1に減っている。

上記の3回の調査結果から、回答生徒において、正義の戦争論を支持するのは15%以下にすぎず、日本は今後どのような戦争も行うべきでないと思うのは85%以上もいる。戦争についての平和主義を、正義の戦争論を支持せず、かついかなる戦争をも行うべきではないとする考え方であるとするならば、3回の調査から、中学生の多くが現在まで一貫して平和主

義的な考えを持っているといえよう。平和主義的な考えは過去20年の間に大きな変化はない。だが、同時に正義の戦争論反対と戦争放棄の考えが弱くなる予兆があることが示されている。つまり、正義の戦争論に対して中学生の反対がわずかに減少し、戦争放棄への確信がわずかに低下している<sup>3</sup>。

2006調査と2016調査で調査地別に比較すると、正義の戦争論への意見に対しては、那覇が最も反対の割合が大きいが、「反対」の生徒が5.7ポイント減っている。戦争放棄(日本は今後戦争をすべきでないと思うか)の考えについては、2006年と2016年の調査共に全調査地で8割以上が支持している。ただし、東京では戦争放棄について「思う」の生徒が8.5ポイント低下している。

#### (4) 第二次世界大戦の戦争体験の継承 戦争体験を伝えるエイジェント

日本においては、子どもたちの平和意識育成

<sup>3</sup> 日本では解釈改憲の下で、自衛隊のなし崩しの海外派兵が行われている。今後もし集団的自衛権が行使されれば、日本の中学生が現在持っている「正義の戦争論」への反

対や、「戦争放棄」といった「平和主義的態度」が、安易に軍事力の行使を認める方向に近づいていくことが予想される(村上2013、p.55)。

表9 第二次大戦継承のエージェント

(複数回答、数字は%)

| 回答               | 東京    | 京都    | 広島    | 那覇    | 2016調査  | 2006調査  |
|------------------|-------|-------|-------|-------|---------|---------|
| テレビ              | 82.4  | 74.7  | 76.5  | 77.2  | 77.9△   | 55.0②   |
| 先生               | 46.6  | 61.4  | 58.6  | 59.8  | 56.0▼   | 77.0①   |
| 祖父母(曾祖父母)        | 37.4  | 33.4  | 33.2  | 42.9  | 36.5    | 37.8③   |
| インターネット          | 34.4  | 37.0  | 31.6  | 41.7  | 35.9    | —       |
| 被爆者              | 10.6  | 21.4  | 58.3  | 26.4  | 28.4△   | 21.4    |
| 新聞               | 19.8  | 23.7  | 24.8  | 31.9  | 24.5    | 25.9    |
| 父や母              | 26.3  | 18.8  | 20.2  | 16.9  | 21.0    | 18.6    |
| 被爆者以外の戦争体験者      | 13.6  | 10.7  | 17.9  | 32.7  | 17.9    | 17.7    |
| 『ひろしま平和ノート』      | 1.6   | 3.6   | 40.1  | 0.8   | 11.5    | —       |
| その他 <sup>4</sup> | 8.1   | 5.2   | 3.6   | 5.9   | 5.8     | 6.9     |
| %の合計             | 280.8 | 289.9 | 364.8 | 336.2 | 315.4   | 260.3   |
| (設問への回答人数)       | (369) | (308) | (307) | (254) | (1,238) | (1,439) |

注：各選択肢において、調査地間で最も多く回答している%を文字囲している。

の基盤は戦争体験の継承にあるが、伝えるエージェントはどのように変化しているのであろうか。表9に見るように、第二次大戦の様子を聞いたエージェントについて、2006調査で最も多く選択されたのは学校の教師(先生)であったが、2016調査ではそれが2位になった(-21.0P)。2016調査で、エージェントとして最も多いのがテレビの77.9%であった(+22.9P)。戦争体験継承のエージェントの主役は、過去10年の間に先生からテレビに移行している。その一方で2016調査では、祖父母・曾祖父母から話を聞いたが37.8%(-1.3P)や、父母から話を聞いたが18.6%(+2.4P)などの割合は、前回の2006調査より10年が経過したのかかわらず、減少が少ない。一方で、2016調査で新しく選択肢に

入れたインターネットは35.9%あり、新聞よりも10ポイントも高くなっている。

調査地別にエージェントの違いを見ると、広島は被爆者から聞いた割合が多く、2016調査では58.3%と突出している。広島市教育委員会が2013年度から、広島市内の全小中学生に配布を始めた『ひろしま平和ノート』の回答が40.1%と高くなっているのが特徴である。一方の那覇は、祖父母・曾祖父母からの話(42.9%)、戦争体験者(被爆者以外)から(32.7%)、また新聞(31.9%)の割合が4調査地の中で最も高い。親族や戦争体験者、また新聞を通じて地域であった沖縄戦の様子について聞いている様子が見えてくる。

<sup>4</sup> 表9において、「その他」に書かれた具体例として、東京のA中学校では、『はだしのゲン』が4つあった。街中で話しを聞いたとする回答があり、広島では「公園にいたおじ

さんが、話しかけてきて話を聞いた。」那覇では「バスで知り合ったお爺さん」が記述されている。

表 10 戦争体験者から直接体験を聞く難しさについての意見

(数字は%)

| 回答                           | 東京           | 京都           | 広島           | 那覇           | 2016調査         |
|------------------------------|--------------|--------------|--------------|--------------|----------------|
| 戦争体験者がいなくなると、戦争がまた起こるのではと心配だ | 32.9①        | 33.3①        | 25.8         | 42.0①        | 33.0           |
| 難しいが戦争体験を継承した方がよい            | 26.9         | 29.0         | 34.4①        | 26.8         | 29.3           |
| 戦争体験者が少なくなるのは仕方がない           | 11.6         | 14.1         | 14.0         | 10.4         | 12.6           |
| 日本で長く平和が続いたのでよかった            | 12.4         | 7.7          | 12.4         | 12.1         | 11.2           |
| 特に何も思わない                     | 12.4         | 11.4         | 10.4         | 6.1          | 10.4           |
| 戦争体験の継承は必要ない                 | 2.0          | 3.4          | 1.3          | 2.2          | 2.2            |
| その他                          | 1.7          | 1.0          | 1.7          | 0.4          | 1.3            |
| 計<br>(回答数)                   | 100<br>(346) | 100<br>(297) | 100<br>(299) | 100<br>(231) | 100<br>(1,173) |

注：質問文は「戦争をよく記憶している者が 80 歳以上と高齢化し、戦争体験を直接聞くことが難しくなりました。下の中から、あなたの気持ちに最も近いものを、一つだけ○をしてください。」

### 戦争体験の継承

戦争体験者が高齢化し、直接体験を聞くことが難しくなったことについて、中学生の気持ちを聞いた（表 10）。生徒からの回答が多い順に「戦争体験者がいなくなると、戦争がまた起こるのではと心配だ」（33.0%）、「難しいが戦争体験を継承した方がよい」（29.3%）、「戦争体験者が少なくなるのは仕方がない」（12.6%）と回答された。「難しいが継承した方がよい」と、戦争体験継承の必要性を認めているのが約 3 割の生徒である。一方で、この間に対して「特に何も思わない」（10.4%）が 1 割、そして非回答（NA）が、サンプル生徒の 6.0%（75 名）いた。

調査地別に見ると、「戦争体験者がいなくなると、戦争がまた起こるのではと心配だ」の危機意識を最も強く持つのが那覇の生徒である（42.0%）。那覇の生徒は、祖父母や体験者から話を聞いた割合が高かった（表 9 参照）。他方、「難しいが

戦争体験を継承した方がよい」が最も多いのは、被爆地広島に住む生徒達であり（34.4%）、これは広島で行われている平和教育の影響を受けていると思われる。

男女別に見ると、「体験者がいなくなると戦争が起こるのが心配だ」と答える女子生徒が 41.8% おり、男子の 24.8% と比べると、17 ポイントも高い。このことから、女子の方が戦争を心配する傾向が強いと言える。

今後も戦争体験が継承されるためには、受け継ぐ次世代の「当事者意識」が求められる。戦争体験が風化するのに対し、何もしない傍観者ではなく、無関心を決め込むのでもなく、戦争体験継承を「他人ごとではなく自分ごと」として当事者意識を生徒達が持ちうるのかが、平和教育において重要事項となる。

「日本の戦争体験を伝える」ことについて、生徒に自由に書いてもらった。記述した生徒の多数は、戦争体験を継承する

ことに賛成の記述をしている。例えば、平和教育研究の意図に沿った記述として、「戦争体験を伝えることは年々難しくなっていると思います。なぜなら、体験された方が高齢者になっているからです。だからこそ、今の若い世代の私たちが今、体験された方のお話を聞いて日本の戦争体験を聞き、それをどんどん広めていくことが大切だと思います。(東京)」と記している者がいた。また、生徒の中には、「僕が今自分ができることについてしっかりとした考えを持ち、経験者から戦争体験を聞いたり、本を読んで調べたりすることが大切だと思う。この戦争について伝える事は絶対にしなければいけないと思う。(那覇)」と真剣に考えている者がいた。

戦争体験の継承については、「日本の戦争被害だけでなく、日本が朝鮮や他の国々に戦争中に行ったことも伝える必要がある」と日本が行った戦争の被害と加害の両面を伝える必要性を述べている者もいた。また、戦争体験を継承することを他人事と思う自分を反省して、「戦争体験をした人が減っているので、身近なところから聞けず他人事のように思ってしまうがちです。私も祖父に聞く前は他人事のように思っていたのでみんながイメージできるくらい知るために伝えていくことは大切だと思います。(京都)」と記すものもいた。那覇では、体験者から積極的に話を聞こうとして、「私は沖縄に住んでいるので、沖縄のことをもっと知りたいと思う。おじいちゃんとかから、詳しく聞いてそれをほかの人にも伝えたいと思う。

(那覇)」と記している者がいた。

それに対して、記述の割合は非常に少ないが、戦争体験の継承に批判的な意見がある。戦争体験継承の効果に懐疑的な意見として、「それ[戦争体験：筆者注]を知っても、別の戦争をしている国を止めることはできない。(広島)」 「戦争体験を人々に伝えても、この先戦争がなくなることは、難しいと思う。(東京)」という記述があった。さらに、世界の現状に対して、「日本以外の国でも、今戦争をしている国はたくさんある。だが、その人々に戦争体験を伝えたら政府は戦争をやめないと思う。(東京)」生徒の中には、過去を振り返ることに疑問を示す「戦争を起こさないように伝えることも大切だけれど、過ぎたことを何回も掘り返すのは良くないと思う。(広島)」という意見があった。沖縄戦のむごい話しについて「戦争体験者から、話を聞くと、戦争のむごさとかわかるから、誰もやりたくないと思うけど、十年後とかは、直で聞けないと思うから、どうなるか、わからん。(那覇)」と迷いを示す生徒がいた。

戦争体験の継承として「良いと思う方法」を生徒に聞いた(表 11)。選択肢の中から三つを選択してもらった結果、「戦争体験者(被爆者など)の話を聞く」が最も多く、60.1%と高かった。次が「平和資料館の見学に行く」であった。「父母や祖父母など家族から話を聞く」は、23.4%と生徒の4分の1以下にすぎない。中学生の身近に、戦争体験を伝え教える親族が少なくなっていることを、生徒自身も自覚しているのであろう。

表 11 戦争体験の継承として良いと思う方法 (三つまでを選択、数字は%)

| 回答                        | 東京    | 京都    | 広島    | 那覇    | 2016調査  |
|---------------------------|-------|-------|-------|-------|---------|
| 戦争体験者（被爆者など）の話を聞く         | 52.2  | 60.0  | 64.5  | 66.3  | 60.1    |
| 平和資料館の見学に行く               | 30.3  | 48.0  | 66.4  | 58.4  | 49.5    |
| テレビで戦争体験についての番組があればそれを見る  | 55.1  | 44.3  | 41.2  | 37.9  | 45.4    |
| 本を読む                      | 40.4  | 33.0  | 27.2  | 30.9  | 33.3    |
| 戦争遺跡の見学に行く                | 33.4  | 34.7  | 27.6  | 30.9  | 31.8    |
| 父母や祖父母など家族から話を聞く          | 26.1  | 22.7  | 17.3  | 28.0  | 23.4    |
| インターネットで探して、戦争体験の証言ビデオを見る | 19.7  | 18.0  | 23.3  | 25.1  | 21.3    |
| その他                       | 1.1   | 0.7   | 1.3   | 0.8   | 1.0     |
| %の合計                      | 258.3 | 261.4 | 268.8 | 278.3 | 265.8   |
| (設問への回答人数)                | (356) | (300) | (301) | (243) | (1,200) |

注 1：質問文は、「あなたは、戦争体験の継承の方法としてどのような方法が良いと思いますか。良いと思う方法を下から選んで、三つまで○をしてください。」

注 2：各選択肢において、調査地間で最も多く回答している%を文字囲している。

それでも、調査地別に見ていくと、那覇では「戦争体験者から話を聞く」が最も多く、また「父母や祖父母など家族から話をきく」が 28.0%と他と比べて人から聞く学習方法が高い。「平和資料館の見学に行く」が最も多いのは広島の生徒である。東京の生徒は、「テレビで戦争体験についての番組があればそれを見る」や「本を読む」を多く選択しており、間接的な学習方法の選択肢を選んでいる。

戦後 70 年が過ぎる中で、若者がリアルに感じる戦争は、1950 年代には朝鮮戦争、60 年代と 70 年代はベトナム戦争に変わり、1990 年代には湾岸戦争、そして 2000 年代に入ってイラク戦争へと変化していった。2010 年代の現在は、東シナ海や南シナ海での領土をめぐる覇権争いに関心が移っている。中学生にとって今起きている紛争や戦争が大きな関心事であり、

70 年以上前となった第二次世界大戦に関しては、中学生の当事者意識を引き出すにはかなりの工夫が必要である。

平和や戦争について学習したい内容を生徒に三つまで聞いた（表 12）。回答では、「世界で起こっている今の戦争や紛争」が最も多く、生徒の第一の関心事が現在の世界の戦争や紛争であることが分かる。従来の平和教育の学習内容である、「日本が過去に行った戦争」の回答が 2 番目で、「日本の戦争被害」（25.7%）が 4 番目である。「日本国憲法における平和主義」（26.6%）は 3 番目であり、憲法論議が盛んになる政治状況の中で、中学生にも日本国憲法について考える機会を保障することが重要になっている。「沖縄の在日米軍基地」をあげたのは、全体では 18.5%（7 番目）だが、調査地別に那覇の生徒に限ってみると 34.3%（3 番目）に

表 12 平和や戦争についての学習で学びたいこと（三つまでを選択、数字は%）

| 回答                       | 2016調査      |
|--------------------------|-------------|
| 世界で起こっている今の戦争や紛争         | 64.3        |
| 日本が過去に行った戦争              | 53.1        |
| 日本国憲法における平和主義            | 26.6        |
| 日本の戦争被害（原爆や都市への空襲や地上戦など） | 25.7        |
| 自分たちの周りのいじめ              | 25.3        |
| 社会で起こっている暴力事件            | 19.7        |
| 沖縄の在日米軍基地                | 18.5        |
| 自衛隊の海外派遣                 | 15.4        |
| 日本によるアジアへの侵略戦争           | 14.3        |
| その他                      | 1.7         |
| %の合計（設問への回答人数）           | 264.6(1223) |

表 13 被爆体験を世界の人々に伝えることは大切か（数字は%）

| 回答        | 1997調査     | 2006調査     | 2016調査     |
|-----------|------------|------------|------------|
| 思う        | 66.6       | 66.7       | 73.4Δ      |
| 少し思う      | 16.8       | 21.8Δ      | 18.7       |
| あまり思わない   | 5.2        | 5.2        | 3.8        |
| 思わない      | 5.4        | 2.6        | 1.4        |
| どちらともいえない | 6.0        | 3.7        | 2.7        |
| 計（回答数）    | 100(1,157) | 100(1,445) | 100(1,248) |

注：質問文は、「あなたは広島や長崎の被爆体験を世界の人々に伝えることを大切と思いますか。」

大きく上昇し、次世代の沖縄県民の在日米軍基地に対する課題意識は高いといえる。

#### 被爆体験の世界の人々への継承

広島と長崎への原爆投下は世界史的事件といえるが、中学生達は被爆体験を世界の人々に伝えることについてどのように思っているのでしょうか。表 13 で示すように、被爆体験を世界の人々に伝える

のが大切と思う（「思う」+「少し思う」）生徒は、1997 調査では 83.4%あり、2006 調査では 88.5%（+5.1P）、2016 調査では 92.1%（+3.6P）となり、過去 20 年間で 8.7 ポイント増加している。2016 年には回答生徒の 9 割以上とほとんどが、被爆体験を世界の人々に伝えることが大切だと思っている。日本の中学生全般においても、被爆体験継承の重要性が広く浸透していると思われる。

表 14 第二次世界大戦で被害が最も大きい国は日本と思う（数字は％）

| 回答     | 東京       | 京都       | 広島       | 那覇       | 2016調査     |
|--------|----------|----------|----------|----------|------------|
| 思う     | 24.9     | 21.0     | 22.4     | 31.0     | 24.6       |
| 思わない   | 18.5     | 23.9     | 30.5     | 19.8     | 23.1       |
| わからない  | 56.6     | 55.0     | 47.1     | 49.2     | 52.3       |
| 計（回答数） | 100(373) | 100(309) | 100(308) | 100(258) | 100(1,248) |

注：質問文は「第二次世界大戦で被害が最も大きい国は「日本」だと思いますか。」

自由記述において、被爆体験の継承については、広島の生徒がいくつかの改善点を示している。生徒の主体的取り組みとして、「伝えるには継承していかななくてはいけないので、少しでも被爆者の話を聞いてみたりしていきたい。」、日本の戦争加害について、「戦争体験を伝えるなら、原爆のことだけでなく、日本が敵国に何をしたのか、そして第二次世界大戦は、決して日本が正義ではなかったことを伝えていかなければならない。」、アメリカが原爆投下を正当化することに対して、「アメリカでは原爆を落としたのは正解だったと思っている人が多数いる。その人たちにも原爆のことを知ってもらいたい」と海外での継承の必要性を述べる。

### 戦争被害の国

日本で継承されてきた戦争体験は、市民の戦争被害体験が中心であり、広島・長崎での被爆、都市空襲、沖縄戦、学童疎開、勤労働員、などの体験が伝えられる。日本軍兵士の国外での戦争体験が伝えられることは少なく、アジア太平洋戦争での日本による戦争加害が教えられることは稀である。

第二次世界大戦で、最も人的被害が大きかった国はソ連であり、またドイツの

戦争被害も大きい。アジア太平洋では、中国の人的被害が大きい。中学生に、第二次世界大戦で被害が最も大きい国は日本と思うか、について質問した（表 14）。被害が最も多いと「思う」生徒が 24.6%、「思わない」が 23.1%でほぼ 4 分の 1 ずつである。その他の半数以上が「わからない」と答えている。

調査地別で見ると、まず広島の生徒は、「思わない」が 30.5%と最も多い。広島の平和教育実践では、原爆の被爆体験だけを教えていては世界の人々の支持を得られず、核廃絶を世界に訴えるのは日本の加害も同時に教えるべきと考える教員が多い。次に沖縄では、生徒の 31.0%が被害が最も大きい国が日本と「思う」と答えている。それは、住民の 4 人に 1 人が沖縄地上戦で亡くなり、そうした戦争の悲惨な体験が生徒に伝えられている影響といえよう。その他の東京と京都の生徒では、広島や那覇と比べて「わからない」と答える生徒が多い。

### (5) 平和博物館への訪問

現在日本各地に 60 館以上の平和博物館があり、それらは地域の平和教育センターの役割を果たしている。広島と長崎と沖縄には大規模な平和博物館があり、

表 15 調査地別に見た平和博物館訪問率

(複数回答、数字は%)

|                                | 東京                | 京都                | 広島                | 那覇                | 全体                  |
|--------------------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|---------------------|
| 1997調査での訪問率                    | 24.9              | 59.9              | 93.8              | 99.4              | 72.2                |
| 2006調査での訪問率                    | 27.6              | 51.7              | 96.2              | 96.4              | 69.1                |
| 2016調査での訪問率<br>(訪問あり生徒数/サンプル数) | 27.3<br>(102/373) | 37.2<br>(115/309) | 97.7<br>(301/308) | 97.2<br>(251/258) | 61.6<br>(769/1,248) |
| 東京大空襲・戦災資料センター                 | 8.3               | 1.3               | 2.6               | 0.8               | 3.6                 |
| 川崎市平和館                         | 1.9               | 1.0               | 1.6               | —                 | 1.2                 |
| 第五福竜丸展示館                       | 2.1               | 0.3               | 0.6               | —                 | 0.9                 |
| しょうけい館                         | 0.5               | —                 | 1.0               | —                 | 0.4                 |
| 立命館大学国際平和ミュージアム                | 0.3               | 6.8               | 1.0               | 0.4               | 2.1                 |
| 舞鶴引揚記念館                        | 0.3               | 3.6               | 0.6               | 0.4               | 1.2                 |
| 大阪国際平和センター                     | 1.3               | 1.9               | 1.3               | —                 | 1.2                 |
| 広島平和記念資料館                      | 10.2              | 26.5              | 95.5              | 6.6               | 34.5                |
| 長崎原爆資料館                        | 4.6               | 2.6               | 18.5              | 69.4              | 20.9                |
| 大久野島毒ガス資料館                     | 0.5               | 0.3               | 4.2               | —                 | 1.3                 |
| 沖縄県立平和祈念資料館                    | 1.9               | 3.2               | 1.9               | 78.3              | 18.0                |
| ひめゆり平和祈念資料館                    | 4.3               | 2.6               | 2.6               | 69.4              | 16.9                |
| 対馬丸祈念館                         | 1.3               | 0.3               | 1.0               | 53.9              | 11.9                |
| その他                            | 1.1               | 1.0               | 1.0               | —                 | 0.8                 |
| N.A.                           | 72.7              | 62.8              | 2.3               | 2.7               | 38.4                |

注 1：訪問率＝訪問あり生徒数／各サンプル数×100

注 2：文字囲いは、各調査地で 2 番目までの訪問率であることを示す。

他府県から多くの修学旅行生が訪問している。

表 15 に示すように、調査地によって生徒達が平和博物館へ行く割合(訪問率)が大きく異なっている。訪問率は、平和博物館の訪問経験がある生徒数が各サンプル数に対して占める割合により算出した。

表 15 の上部は、各調査地の中学生が訪問した割合を調査別に示したものである。いずれの調査でも、平和博物館への訪問率が高いのは広島と那覇である。次が京都と東京であるが、京都については 2016 調査で訪問率が大きく下がっている。こ

れは広島への修学旅行が減ったためと思われる。

2016 調査では、分析対象の 1248 名の内で 769 名が「訪問あり」で、訪問率は 61.6% である。残りの 479 名(38.4%)がいずれの平和博物館にも行ったことがなく、「訪問なし」である。2016 調査を調査地別に詳しく見ると、広島は訪問率が高いが、これは地元の広島平和記念資料館に行く率が 95.5% と高いことによる。沖縄については、複数の平和博物館に多く訪問している。那覇の生徒の場合は、県内の沖縄県立平和祈念資料館(78.3%)や

ひめゆり平和祈念資料館(69.4%)に行く割合が高い。また、九州修学旅行に行く影響で、長崎原爆資料館に69.4%が訪問している。京都の場合は、広島平和記念資料館への訪問率は26.5%である。京都市内にある立命館大学国際平和ミュージアムを訪れた生徒は6.8%にすぎない。東京では、平和博物館を訪問した生徒は、広島平和記念資料館が10.2%であり、東京都江東区にある東京大空襲・戦災資料センターを訪問したのが8.3%である。

## (6) 平和形成の方法について

### 平和形成への貢献意欲

生徒達は平和な社会を形成することについてどのように思っているのでしょうか。表16に見るように、2016調査で社会が「平和であるために何かしたい」と思っている生徒は74.7%(+3.2P)あり、生徒達の平和への貢献

意識はかなり高いといえよう。

では、生徒達は社会が平和であるために何をしたいと思っているのだろうか。2016調査で「はい」と答えた生徒のみを対象に、したいと思う活動内容を複数回答で聞いた。表17によると最も多いのが、「わからないけど、何かしたい」で64.2%(+4.1P)である。「他の人と仲良く力を合わせ、いじめをなくす」が37.3%(+8.2P)で2番目に入っている。このことから、〈いじめ〉を平和形成の課題として重視する生徒が増えたことがわかる。続いて「貧しい国への援助活動に協力する」が35.8%(-4.4P)となっている。

社会が平和であるために何もしたくないと思う生徒達は、なぜそのように思うのであろうか。何かしたいと思っているかに「いいえ」と答えた生徒のみを対象に、その理由を聞いた。表18によれば、2016調査で最も多いのが「何をしたいのかわからない」65.7%(+5.2P)である。「自分一人でも意味がない」が5.4ポイント増え

表16 社会が平和であるために何かしたいと思っているか(数字は%)

| 回答     | 2006調査      | 2016調査     |
|--------|-------------|------------|
| はい     | 71.5(1,036) | 74.7(931)  |
| いいえ    | 28.5(413)   | 25.3(315)  |
| 計(回答数) | 100(1,449)  | 100(1,246) |

表17 平和のためにしたいと思っていること

(複数回答、数字は%)

| 回答                   | 2006調査       | 2016調査     |
|----------------------|--------------|------------|
| わからないけど、何かしたい        | 60.1①        | 64.2       |
| 他の人と仲良く力を合わせ、いじめをなくす | 29.1④        | 37.3△      |
| 貧しい国への援助活動に協力する      | 40.2②        | 35.8       |
| 自然保護に協力する            | 31.8③        | 25.6▼      |
| 平和の大切さを人々に訴える        | 23.2         | 23.0       |
| 平和運動に参加する            | 13.8         | 14.3       |
| その他                  | 3.5          | 3.2        |
| %の合計(設問への回答人数)       | 202.1(1,033) | 203.4(931) |

表 18 平和のために何もしたくない理由 (複数回答、数字は%)

| 回答              | 2006調査     | 2016調査     |
|-----------------|------------|------------|
| 何をしていいのかわからない   | 60.5①      | 65.7△      |
| 考えたことがない        | 47.9②      | 38.4▼      |
| 自分一人でも意味(効果)がない | 32.4③      | 37.8△      |
| 面倒なので、かかわりたくない  | 23.0       | 22.9       |
| 大人がやるべきこと       | 13.6       | 10.8       |
| 今平和だから必要がない     | 10.9       | 7.6        |
| その他             | 5.8        | 5.7        |
| %の合計(設問への回答人数)  | 194.4(413) | 188.9(315) |

ている。上記の結果から、平和のために何かしたいと思っても思っていないか、何をしていいのかわからないとの回答が最も多く、さらにこの回答が過去10年間の間に増えていることが示された。

国同士が起こす戦争に対して無力感を記す生徒がいる。調査についての自由記述で、平和形成に対して「最初は戦争が悪いとかきれいなことを言っていたけど実際[自分は]何もやってないし、何もできないと思った。(東京)」や、「私には力がなく、戦争が起きている国があっても、直接そこで支援しようとする勇気がない。そして、少し人事[ひとごと]のように思う自分がある。(那覇)」があった。反対に課題への前向きな記述として、「私たちは、戦争について知らないことが多いけど、それを自分たちの意思で調べたりして、平和な世界に近づきたいと思った。これから先、戦争を知らない小さい子たちにも戦争がダメだということを伝えたいと思った。(那覇)」があった。

### 平和形成するための学習課題

生徒達の平和社会形成への貢献意欲が高いこと、また平和社会形成の活動内容について上に示した。それでは、生徒達は平和社会形成に必要な学習課題が何と思っているのでしょうか。つまり、生徒達は何を<学習すれば>平和な社会をつくることができると考えているのでしょうか(表19)。調査では、平和な社会をつくるために学習する必要がある内容(学習題材)を三つ選択してもらった。8つの選択肢の内、最も多かったのが「生命の大切さ」で60.5%ある。続いて「戦争体験の継承」(44.7%)がきている。

### 平和形成に努力した人や団体

2016調査では平和の形成に努力した人や団体について知っている(「知っている」+「少し知っている」と答えた生徒(290名:23.4%:無回答を除く))に対して、その具体名を調査票に記入してもらった。その項目への有効記入者数は232名で、それは回答生徒全体の18.5%にあたっている。他方、2006調査では知っていると答えた生徒(335名:23.4%)の内、

表 19 平和な社会をつくるために学習する必要があるもの（三つまでを選択、数字は％）

| 題材                           | 2016調査       |
|------------------------------|--------------|
| 生命の大切さ                       | 60.5         |
| 戦争体験の継承                      | 44.7         |
| 偏見や差別などの人権問題                 | 41.6         |
| いじめ問題                        | 32.7         |
| 意見の違いを話し合いによって解決する方法(非暴力的方法) | 24.2         |
| 広島や長崎の原爆被爆                   | 24.0         |
| 国際連合の活動                      | 23.2         |
| 近隣諸国との友好な関係                  | 19.4         |
| その他                          | 1.2          |
| ％の合計（設問への回答人数）               | 271.5(1,207) |

表 20 平和な社会をつくるために努力した人や平和運動団体の名前（数字は人数）

|     | 2006 調査  | 2016 調査   |
|-----|--|---|
| 個人名 | マザー・テレサ（22）、黒柳徹子（14）、ガンジー（14）、杉原千畝（6）、マータイ（3）、オードリ・ヘップバーン（3）   | マザー・テレサ（21）、マハラ・ユスフザイ（15）、杉原千畝（15）、ガンジー（14）、リンカーン（4）、オードリ・ヘップバーン（3）、キング牧師（3）、黒柳徹子（3）          |
| 団体名 | ユニセフ（70）（ユニセフ募金の9も含む）、国際連合（20）、NGO（13）とNPO（13）、国境なき医師団（11）、赤十字協会（8）、WHO（8）、全国水平社（8）、募金や寄付活動（7）、赤い羽根募金（5）、青年海外協力隊（4）、JICA（3）、米軍基地の反対運動（3） | ユニセフ（49）（ユニセフ募金の4も含む）、NGO・NPO（13）、青年海外協力隊（11）、国境なき医師団（10）、赤十字協会（5）、募金や寄付活動（5）、国際連合（4）、JICA（3） |

具体名の有効記入者数は270名で、それは回答生徒全体の18.6%にあたり、2016調査と全く同じ割合である（村上2009、pp.343-345）。

表20で、具体的な記入名を見ていこう。個人名では、2006調査と比較して2016調査で増えた記述は、17歳で2013年にノーベル平和賞を受賞したマハラ・ユスフザイと、ユダヤ人にビザを発行した杉原千

畝である。団体名については、青年海外協力隊の記述が増加している。テレビ報道などの影響もあり、青年海外協力隊に関心を持つ生徒が増えている。反対に減ったのがユニセフや国際連合と全国水平社である。

### 3. 調査結果のまとめ

平和主義を、正義の戦争論を支持せず、かついかなる戦争をも行うべきではないとする考えと限定すれば、過去 20 年の間で調査に回答した生徒は一貫して平和主義的であり、大きな変化はない。その意味で、日本の平和教育は、反戦平和志向の生徒を育成するという「政治的社会化機能」を現在まで果たしてきた。だが、調査結果では、正義の戦争論反対と戦争放棄の考えが弱くなる予兆があることが示されている。つまり、正義の戦争論に対して中学生の反対がわずかに減少し、戦争放棄への確信がわずかに低下していることが示された。

第二次世界大戦の様子を伝えるエイジェントは、2006 調査では学校の教師（先生）が最も多かったが、2016 調査ではテレビが最も多い。戦争体験継承の第一のエイジェントは、過去 10 年の間に先生からテレビへと移行している。一方で 2016 調査では、前回調査より 10 年が経過したにもかかわらず、祖父母などから話を聞いたと、父母から話を聞いた割合の減少が少ない。このことから、テレビや学校教師が中心となり、また子どもの祖父母や父母が、戦争体験継承の「文化的伝達機能」を果たしている。

上に述べた生徒における「平和主義的態度」の低下の予兆は、エイジェントの変化とそれが伝える内容に影響を受けているといえよう。特に戦争体験継承の主役エイジェントとなったテレビの影響が今後は強くなると思われ、東京の生徒が戦争放棄を支持する割合（「思う」の回答）

が 2016 調査で 8.5 ポイント減ったことに、その影響が現れているかもしれない。

戦争体験者の高齢化により体験継承が難しくなることについて、生徒の多くが、戦争がまた起こるのではと心配し、難しくはあるが戦争体験を継承した方が良いと思っている。戦争体験の継承として良い方法を生徒に聞くと、「戦争体験者（被爆者など）の話を聞く」が最も多かった。次が「平和資料館の見学に行く」であった。

戦後 70 年経っても、祖父母や父母など家族が戦争体験を継承する役割は残っている。特に那覇ではエイジェントや学びたい内容としてその回答が多い。広島では、戦争体験継承のエイジェントとして、被爆者や独自の教材の『ひろしま平和ノート』の回答が多い。被爆地広島の生徒に限らず、被爆体験継承の重要性が日本の中学生全般に広く浸透している。広島では平和博物館への訪問率が高く、沖縄では親族や戦争体験者や新聞から沖縄戦について多く聞いている。

平和や戦争について学びたいことは、「世界で起こっている今の戦争や紛争」が最も多く、生徒の第一の関心事が現在の世界の問題であることが分かる。学習方法として、インターネットで探して、戦争体験の証言ビデオを見るという回答が 2 割ある。現在はネット社会となり、デジタル情報が蓄積される中で、戦争体験継承の新たな試みとして、戦争体験者の証言ビデオのアーカイブズが日本各地でつくられており、活用が待たれている。

2016 調査で、日本が平和でない理由として、<いじめの問題>をあげる生徒が

多かった。平和のためにしたいこととして、「仲良く力を合わせいじめをなくす」が、2番目にあげられており、いじめを平和形成の課題として重視する生徒が増えていた。このように、平和な社会をつくるために学習する必要があるものとして、過去10年の間にいじめ問題を重視し、いじめをなくすことが大事と思うようになっている。

平和主義を理念の一つとする日本国憲法の下で、過去20年の間、中学生達は平和主義的態度を育んでいる。生徒達の平和を求め戦争に反対する態度に応え、平和な社会形成に貢献できる生徒の資質・能力の育てることが、今後も学校教育に求められているといえよう。テレビや新聞などのマスメディアや平和博物館には、それをサポートする役割が強く期待されている。

## 謝辞

本研究は、平成26年度～28年度科学研究費補助金、基盤研究(C)の「平和教育の現代化に向けたカリキュラム開発についての比較社会学的研究」(課題番号26381126)の研究成果の一部である。

本研究を進めるに当たって、東京、京都、広島、那覇における18の中学校の先生方に、2016年1月から3月にかけて質問紙調査を実施していただいた。また、1,248名の多数の生徒たちに調査に協力してもらった。そうした協力がなければこの意識調査は実施することはできなかった。ここに記して謝意を表す。

## 参考文献

- 村上登司文(2009)『戦後日本の平和教育の社会学的研究』学術出版会。  
村上登司文(2013)「ドイツの平和教育の考察」『広島平和科学』35。





問12 あなたは広島や長崎の被爆体験を世界の人々に伝えることを大切と思いますか。

- 1 思う 2 少し思う 3 あまり思わない 4 思わない 5 どちらともいえない

問13 第二次世界大戦で被害が最も大きい国は「日本」だと思いますか。

- 1 思う 2 思わない 3 わからない

問14 戦争の中には侵略戦争のように悪い戦争と、国を守るよい戦争（正義の戦争）があるという意見を、あなたはどのように思いますか。

- 1 賛成 2 少し賛成 3 少し反対 4 反対 5 どちらともいえない

問15 日本は今後、どのような戦争もおこなうべきではないと思いますか。

- 1 思う 2 少し思う 3 あまり思わない 4 思わない 5 どちらともいえない

問16 戦争をよく記憶している者が80歳以上と高齢化し、戦争体験を直接聞くことが難しくなりました。下の中から、あなたの気持ちに最も近いものを、一つだけ○をして下さい。

- 1 日本で長く平和が続いたのでよかった 4 特に何も思わない  
2 戦争体験の継承は必要ない 5 難しいが戦争体験を継承した方がよい  
3 戦争体験者がいなくなると、戦争がまた起こるのではと心配だ 6 戦争体験者が少なくなるのは仕方がない  
7 その他（ ）

問17 あなたは、戦争体験の継承の方法としてどのような方法が良いと思いますか。良いと思う方法を下から選んで、三つまで○をしてください。

- 1 本を読む 5 インターネットで探して、戦争体験の証言ビデオを見る  
2 戦争体験者（被爆者など）の話を聞く 6 平和資料館の見学に行く  
3 父母や祖父母など家族から話を聞く 7 戦争遺跡の見学に行く  
4 テレビで戦争体験についての番組があればそれを見る 8 その他（ ）

問18 あなたは、「平和や戦争」についての学習の中で何について学びたいですか。学びたいものを下から選んで、三つまで○をしてください。

- 1 日本が過去に行った戦争 7 沖縄の在日米軍基地  
2 世界で起こっている今の戦争や紛争 8 日本の戦争被害（原爆や都市への空襲や地上戦など）  
3 自分たちの周りのいじめ  
4 社会で起こっている暴力事件 9 日本によるアジアへの侵略戦争  
5 日本国憲法における平和主義 10 その他（ ）  
6 自衛隊の海外派遣

<平和な社会をつくることについて>

問19 社会が平和であるために、あなた自身で何かしたいと思っていますか。

- 1 はい →問20へ進む                      2 いいえ →問21へ進む

問20 問19で「はい（平和のためにしたい）」とした人だけ教えてください。してみたいと思っていることは何ですか。下から選んで、あてはまるものすべてに○をしてください。

- |                        |                                    |
|------------------------|------------------------------------|
| 1 わからないけど、何かしたい        | 4 貧しい国への援助活動に協力する                  |
| 2 自然保護に協力する            | 5 平和の大切さを人々に訴える                    |
| 3 他の人と仲良く力をあわせ、いじめをなくす | 6 平和運動に参加する                        |
|                        | 7 その他（具体的に：                      ） |

問21 問19で「いいえ（平和のためにしたくない）」とした人だけ教えてください。その理由を下から選んで、あてはまるものすべてに○をしてください。

- |                                       |                                    |
|---------------------------------------|------------------------------------|
| 1 考えたことがない                            | 5 いま平和だから必要がない                     |
| 2 何をしたいのかわからない                        | 6 大人がやるべきこと                        |
| 3 自分一人でも意味（効果）がない                     | 7 その他（具体的に：                      ） |
| 4 面倒 <small>めんどろ</small> なので、かかわりたくない |                                    |

問22 あなたは、平和な社会をつくるために日本や世界で努力した人や平和運動団体を知っていますか。

- 1 知っている →（具体的に： \_\_\_\_\_ ）  
2 少し知っている  
3 知らない

問23 あなたは、「平和な社会をつくる」ために何を学習する必要があると思いますか。必要があると思うものを下から選んで、三つまで○をしてください。

- |              |                                    |
|--------------|------------------------------------|
| 1 国際連合の活動    | 6 近隣諸国との友好的な関係                     |
| 2 戦争体験の継承    | 7 偏見や差別などの人権問題                     |
| 3 生命の大切さ     | 8 意見の違いを話し合いによって解決する方法（非暴力的方法）     |
| 4 いじめ問題      | 9 その他（具体的に：                      ） |
| 5 広島や長崎の原爆被爆 |                                    |

